

激情の友へ

昨年末はずっと風邪気味で、医者からの風邪薬を含んでも良くはならない日が続いた。十二月は一気に疲れが出るのだろう。

世話になった歌人諸氏の訃報も続いていたが、大野道夫君も体調がはかばかしくないとこの報を受けた。あと十年はバリバリ活躍できたのに、誠に残念である。

そんな折、長崎の馬場昭徳氏から小紋潤が危篤との知らせが社に届いた。

十二月二十七日、この日は仕事納めの日であったが、小紋潤逝去の知らせ。やはり駄目だったかと社員ともども哀しむ。佐佐木頼綱君がただちに各新聞社へ死亡の日時や故人の経歴をメールした。

小紋潤と出会ったのは一九七二年頃だったように思う。明確ではないが、新井貞子さんの第一歌集『幻野祭』の出版記念会の会場では無かつたらうか。

互いに初見の挨拶をすると、「佐佐木幸綱さんはどの方ですか？」と彼から聞かれたことをはっきり記憶している。

以降、長崎へ戻って行かれた日まで、どれだけ二人で新宿、阿佐ヶ谷を中心に酒を酌み交わしたことだろう。

出会って間もない頃、「東京へ来てから旨い魚をほとんど食べてないです。晋樹さん、どこか連れてつてくれますか」と言うので、当時僕が住んでいた東高円寺近くの生魚店へ案内した。

店主は釣り好きで、当日釣った魚を夜に食べさせてくれるのである。「旨かです。こんな久しぶりだわ！」と大声を出し、酒をガブ呑みしたのであった。語気も荒く、激しい男だと思った。

後年、谷岡重紀君が入会し、「心の花」の編集を共にするようになってからは、僕

晋樹隆彦

よりも谷岡君と小紋は痛飲するようになっていった。

出会った頃、彼は波書房という所に勤めていたと述べた。同僚に堀慎吉さんという美術家がいる、その方の意識は高く、画もとても良いから何かの折に使ってくれたらと言う。

後年、「短歌現代」や「短歌往来」の表紙、歌集のカバー等のデザインも多く手がけていただいた恩人である。

堀さんはやがて甲府付近に住むようになり、保坂耕人さんの歌集や甲府歌会の方々の歌集デザインしてくれた。

小生の第一歌集『感傷賦』も第二歌集『天心に帆』も堀さんの装幀である。

二〇一六年二月十五日、谷岡君が小紋潤の歌稿を小社に持って来た。幸綱さんの帯文にあるようにまさに「待望」の歌集であ